

## 助け助けられ、みんなで子育て

馬場 文子

今から20年前、生後1ヶ月の長女を抱えての引越し先は、全体が一つの街を形成している大型マンションだった。スーパ―も本屋も花屋も病院も、小学校までも敷地の中にあった。

引越しの最中、隣り合った2つの玄関ドアの前でピカピカのランドセルを背負った男の子がしくしくと泣いていた。胸につけた名札でわかった、今日からお隣になる子だと。

「きつとすぐにママ帰ってくるよ。」と声を掛け、家具一つないがらんとした我が家に招き入れた。彼が新居で初めてのお客さまだった。

この日から、我が家の子育てはこのマンションの中で始まった。

お隣には1歳の女の子もいて、少し年上のお姉ちゃんの成長を見ながらお母さんにいろいろ教えてもらい随分と助けてもらった。長女の初節

句の時は、お雛様、ほんぼり、牛車等々、お隣の家で飾る場所を一つ覚えては我が家に戻り、何度も二つのドアを行き来し、ようやく飾り終えたものだった。

長女出産後病院から戻ったアパートでは、ひたすら主人の会社からの帰りを待ち、日が傾く夕方になると夜泣きする娘の声を思い出し、長い長い夜が不安で自分まで泣き出しそうな毎日だった。

私の実家は車でも電車を乗り継いでも3時間ほどかかるところにあり、母親は10年以上前に亡くなっていった。実家の人間が我が家を訪れるのはお祝い事の時くらいで、年に1回あるかないか。主人の実家は都内だが、父も母も仕事を持っていて、やはり滅多にたずねてくることはなかった。

両家の親に日々の子育てを手助けしてもらうことはほとんど期待できず、「遠くの親戚より近くの他人」に助けられ、頼っての子育てだった。全9棟、総戸数2000戸近いこのマンションには、同じ年齢の子はあちらにもこちらにもいて、同じ月齢の子も片手以上、同じ誕生日の子も珍しくないほどだった。そんな環境の中毎日のようにベビーカーを押

し散歩に出かけ、次々と新しいお友達が増えていった。

マンションの中を歩いていけば、必ず知り合いの誰かに会えた。初めての子育てでわからないことや不安なこと口に出して聞いてもらえ、同じように悩んでいる母親がいることを知ると、気持ちが悪くなった。

実家からの荷物や頂き物がたくさんある時は、果物や野菜や魚をいくつかの小袋に分け、ベビーカーを押して親しい人のお宅を配って回った。やがてそれぞれの家族に兄弟が生まれ、お下がりの洋服も回しあったり、七五三のように一生に一度のものだと、持ち主のお宅から今年はあるお宅、来年はまた別のお宅と、お互いの兄弟構成を知っていて、そんなことが当然のこととして行われていた。心ばかりのお礼を添えて、お互いに無理や無駄のないように暮らしていたように思う。

中でも一方ならぬお世話になった方達がいる。

ある日の早朝、義父から急遽入院することが決まったので、すぐに車で来てほしいという連絡が入った。主人はすでに会社に行ってしまった後。幼稚園に通う5歳の子とまだ2歳の子と2人を家に残していくこと

はできない。

迷った挙句、同じ幼稚園に通うお子さんがいるIさんをお願いできないかと電話を入れると、朝まだ早い時間にもかかわらず彼女は快く引き受けてくれた。急いで幼稚園の身支度だけを済ませ、長女を幼稚園のお迎えのバスが来るまでの間、そして次女を一日預ってくれたのだ。

「帰りの時間は気にしないで」と、氣遣いの言葉まで掛け送り出してくれた。

Iさんの娘さんは一人っ子で我が家の長女と次女の間の年齢、子供同士も気が合い姉妹のように育った。ある年のゴールデンウィークに1泊のキャンプに出かけたこともあった。特別予定がないとつまらなそうに言ったI家の娘さんを誘うと、喜んで一緒に行くことになった。もちろん我が家の子供達も大喜びだ。渋滞の車の中も楽しく、水遊びをしてバーベキューをして花火をして、子供達は屋根裏部屋にみんなで並んで眠った。

Yさんは小学校1年生と1歳の女の子のいる我が家のお隣の真下の部

屋に住み、階段15段の上り下り、10秒でお互いの家を行き来していた。Y家の兄弟と我が家の姉妹は誕生日も1ヶ月と離れていなくて、出産前後の定期健診も予防接種もいつも一緒だった。

娘たちが唯一スキー場に行き、生まれて初めての雪を見たのはY家のお蔭だ。長女が4歳の誕生日の日主人が出張で家に行かないことを話したら、一緒にスキーに行かないかと誘ってくれた。Yさんの御主人が運転をし、母親2人子供が4人、1台の乗用車に乗って新潟まで行ったのだ。今思えば、どれほど狭く不自由なことかと思うが、子供達の驚いた顔や喜んだ顔、楽しいことしか思い出せない。

そんな親しいお付き合いの続いたYさんが引越していったのは、長女が6歳の時だった。

その時、私のおなかの中には3人目の子がいた。ご自身も新しい環境への不安や心配もあったであろうに、さかんに私の体調と生まれてくる子の世話のことを心配してくれた。

「引越さなければ私が面倒見て上げられたのに、大丈夫？大丈夫？」

と、別れの日に何度も言ってくれた言葉を思い出すと、今でもじんわりと涙がこみ上げてくる。

みんなでも過ごした時間も貴重なものだった。

幼稚園入園前の子供達は毎日自由な時間の連続だ。そしてその母達も。そんな時間の中で毎日一緒に過ごしている仲良しグループの母と子みんな、歌ったり運動したりお絵描きをしたり、プレ幼稚園のようなことを始めることになった。

最初はテレビの真似だったり、本に書いてあることを参考にしたり、母親が当番制で先生役をした。子供や仲間内とはいえ、伴奏のために人前でピアノを弾いた時は久しぶりにとても緊張した。その練習のために私が子供の頃使っていたピアノを実家から大移動させた。その後私が弾く回数は減っていったが、子供達がピアノのレッスンに通うようになりそれは今でも続いている。

しばらくすると母親先生の一人、音楽大出身の人が専門的な知識を身に付け指導者としてやっていきたいと声を上げ、週に数回養成のスクー

ルに通うようになった。スクールに通う時間は、もちろん他の誰かがそのお子さんを預った。またピアノが得意な母親もいて、簡単な伴奏なら即興でもでき、彼女が伴奏担当となっていた。よくできたことに美術大出身の母親もいて、工作はお手の物でいくつもの作品を次々と仕上げてくれた。これと違って何の特技もない私は、泣いている子供をなだめたり、準備のお手伝い程度のことしかできなかったが楽しい充実した時間だった。

我が子たちが入園入学、小学生になった後も、母親先生達の会は続き、マンションの内外を問わず毎年20組程の親子が週に一度通い続けた。

やがて、我が家も慣れ親しんだそのマンションから引越す日がやってきた。暮らし始めてからちょうど10年。長女は11歳、無事生まれ元気に育った長男が5歳の時だ。新しい家は一戸建て。お隣には長男と同じ年の男の子もいて、またご近所の方と仲良くやっていけそうだと思っていた。

引越してから2ヶ月ほど経った頃のことだ。何度か子供達も家を行き来して遊ぶようになっていた。その日私は用事があり、上の娘たちはそれぞれに出かけ、長男が一人家に残り留守番をすることになった。用事は2、3時間。その間お隣の方に預ってもらえないかとお願いをしてみると、はつきりと断られた。私が家にいない時に、もし何かあっても責任をもてないからという理由だった。マンションの頃と同じようにと思っていた私は、いろんな考えをする人がいることを改めて思い知った。

その後、幼稚園の延長保育にお世話になったり、姉弟だけで留守番ができるようになるにもなり、だんだんに母親がいなくても大丈夫の時間も増えていった。

ただ子供達が本当に小さかった頃は、ご近所の方々の手助けがなかったら、とても私一人ではどうしようもなかったことだろう。ただ寝ているだけの生まれたばかりの赤ちゃん一人の相手でも、一人ぼっちのアパートで夜泣きを恐れ夕暮れ時が何よりも嫌だったことを今でもはつきりと覚えている。ほんの1ヶ月ほどのことだったけど。



心細さと追い込まれた気持ちで子供と接していたら、必ずひずみが生じその矛先は弱い立場の子供に向かつてもなんらおかしくない。街中でも子供相手に声を荒げている母親を見かけると、そんなにむきにならなくても大丈夫よと声を掛けたくなる。見ず知らずの人に突然そんなことをされたら、相手にすれば大きなお世話と不愉快に思うだろうと実際には心の中だけだが。

私はとても恵まれた環境の中で子供達を育てることができたのだと、今振り返ってみて思う。わからないことだらけの初めての子育ては、話す相手、聞いてくれる相手がいるだけでも大きな存在だ。身近にそんな子育て真最中で悩んでいる人がいたら、少しばかりの先輩母として声を掛け、少しでも軽い気持ちになつてくれたらと思う。そしてそんな輪が少しでも広がっていったらと思う。